

《もくじ》

- 「東日本大震災」罹災者の方々に
お見舞いを申し上げます
6頁・国難をふまへ緊急提言！
「新内海ダム」建設中止と既設内海ダムの撤去を
……………山中 忍(医師)
- 2頁・血税が海に投げ込まれて“万里の長城”
……………諸橋 潔(正会員)
- 3頁・会員になりませんか(会則抄録)
- 4頁・東京電力「西大滝ダム」告発の経過
……………大野 峰太郎(正会員)

奔流

題字揮毫・梅原猛

《第4号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六(共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎(共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

大河の一滴 (4)

河川生態系と経済活動との共存の道を探る

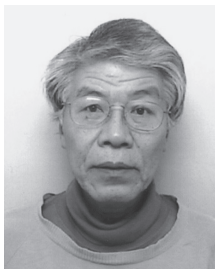
― 巨大水力発電は「グリーン・エネルギー」か ―

室田 武

◇川は人間だけのものではない

声高に「水力発電はグリーン・エネルギー」と主張する方(団体)がある。果たして本当にそう断じていいのか。この点を検証する。

まず、水力発電という技術が登場する以前、あるいはその登場後も人間による水力利用を考えてみよう。世界史や日本史の上で見えやすい水力利用の形として、水車や水唐臼(添水、サコンタ等の異名)がある。それらの装置への導水は、川の主流を堰き止めることにはない。主流の水の一部を分流させるために堰を作るが越流堤で河川生態系への負荷はさほど大きくなかった。その一方で川の主流そのものを木材流送に活用してきたのが筏流しであり、木材を筏に組まずにバラバラに流すのを管流しといい、いづれもダメのない事



ではじめて可能な輸送方法である。

また、水車には舟水車というタイプもある。主流の岸辺近くに水車をのせた舟を浮かべ、綱で岸につないでおくと、舟は動かないが水車は主流の水で回る。そして、舟全体が水力駆動の工場となる。古代ローマで穀物製粉に使われ、近代日本では矢作川のガラ紡水車が有名である。

これらの水力利用による経済活動は、比較的小規模で河川生態系を大きく変えるものではなかった。したがって、川は水生生物の棲家であり、また自由な交通網であり得た。かつて信濃川が大きなサケ川であったように、川は人間だけのものではなく、多くの生物が様々な目的で利用してきたものである。

◇川を単なる「材料」にしているのか

ところが主流を堰き止めた巨大ダムによる水路式発電は、ほぼ独占的に水を収奪してしまう。いったん水力発電の技術開発がなされると、水力利用をよ

り大規模に行おうとする人間の欲望が肥大する。川は川である必要がなく、発電を効率よく行うための材料に過ぎないものになる。

水の位置エネルギーそれ自身は、太陽エネルギーが創り出すものでグリーン・エネルギーといえる。しかし、それを人間の都合で利用するための技術はグリーンとは限らない。信濃川の水路式発電での宮中ダムがその典型だが、河川生態系を著しく破壊する「反グリーン技術」、ないしは「ダーティな技術」である。

「人間はいつい水力を利用すべきではない」と、極言するつもりはない。人間は他の生物と関係しあって生きてきた。そのかぎりでは何らかの環境変化は常に起こっている。そのことを前提とした上で水車、舟水車、流送、小水力発電などを見直し、河川生態系と経済活動との共存の道を探ることが求められている。原発や巨大水力発電のような技術に頼らず、節電中心のエネルギー政策に転換して、ローカルな電源自立が重要になるだろう。

(同志社大学経済学部教授)

*主な著書に、『入会林野とコモンズ』(共著) 日本評論社、『グローバル時代のローカル・コモンズ』(共編著) ミネルヴァ書房、『コモンズ研究のフロンティア』(共編著) 東京大学出版会など多数。